

目次

『蜻蛉日記』女から贈る歌

——『源氏物語』への階梯——……………

高野晴代 1

『蜻蛉日記』下巻における養女迎えの時期について……………

川村裕子 19

道綱母と「高光日記絵巻」(扇流)

——「高光日記」が望見できる資料は、『重之子僧集』か——……………

松原一義 37

追懷の方法

——『和泉式部日記』の場合——……………

久保木寿子 69

『和泉式部日記』における和歌贈答の挫折……………

秋澤 互 99

〈演出〉される源氏物語・〈再生〉する源氏物語

——紫式部日記の中の〈源氏物語〉——

小山清文 129

『紫式部日記』に記された縁談

——『源氏物語』への回路——

福家俊幸 159

『更級日記』孝標をめぐる風景

——その大いなる「凡庸」について——

横井孝 189

迷走する孝標女

——石山詣から初瀬詣へ——

久下裕利 209

あとがき

..... 福家俊幸 237

『蜻蛉日記』女から贈る歌

——『源氏物語』への階梯——

高野晴代

一 はじめに

『蜻蛉日記』下巻に次の贈答歌がある。

それもしるく、その後おほつかなくて、八九日はかりになりぬ。かく思ひおきて、数にはとありしなりけりと思ひあまりて、たまさかに、これよりものしけること、

かたときにかへし夜数をかぞふれば鳴の諸羽もたゆしとぞなく（道綱母）

返りごと

いかなれや鳴の羽がきかず知らず思ふかひなき声になくらむ（兼家）

とはありけれど、おどろかしても、くやしげなるほどをなむ、いかなるにかと思ひける。このごろ、庭もはだらに花降りしきて、海ともなりなむと見えたり。

『蜻蛉日記』 下巻における養女迎えの時期について

川 村 裕 子

I はじめに——入内ということ

『蜻蛉日記』は下巻に入ると養女迎えの記事が置かれ、そこから下巻全体を俯瞰する読みといったものが広がっていった。そして、『蜻蛉日記』研究のなかではこれを入内の希望と捉えてきた。それに対して倉田実氏は『蜻蛉日記の養女迎え』のなかで、天禄三年（九七二）の政治的状况を分析し「入内の可能性なし」という結論を導き出した。

思うに『蜻蛉日記』研究のなかにおける入内という言葉の使用法、そしてそのなかに込められた意味と同書に書かれる入内の解釈との間には隔たりがあるのではなからうか。なぜならば、『蜻蛉日記』研究のなかにおいての入内というのは木村正中氏が説くように、

○男子の場合には容易に望めないような飛躍的な幸運が、女子ならば、入内や結婚によってもたらさ